

第8章

都市部の住民を対象とした木育

第1節 | 運動の社会学的位置づけ

第1章第2節で取り上げた「森は海の恋人」運動のような環境保全運動について、帯谷は表8.1に示すように4つの時期に分けて整理している〔帯谷2003〕。

第1期：立地点の住民や自治体を中心に始まった運動は、主として生活を守るために補償の充実を求めるという作為要求型の運動であった。このような担い手が立地点の住民や自治体である「生活保全運動」に対して、担い手が地域のアクターとなる「自然保護運動」も同時期に見られた。

第2期：作為阻止型の住民運動が各地で興隆していく時期である。権利防衛を志向した運動は主に立地点の住民によって担われ、中には革新系の政党など都市部のアクターとの連携を図る運動もあったが、担い手の多様性や運動の空間的な広がりという点では限定的なものであった。

第3期：80年代後半に入ると、運動は立地点の住民に加えて、都市部の環境NPOや研究者、一般市民など他地域の多様な主体がその担い手となって関わってくる。いわば、ネットワーク型の運動の生成と展開期である。多様なメディアの活用を通じて世論に訴えかけていくという戦略は、硬直した事業過程への批判となって世論を喚起することとなった。

第4期：90年代後半に入ると、新たな特質を有する運動が顕在化した。行政が排他的に担ってきた「公共性」に対する新たな「市民的公共性」の提

表 8.1 各時期の運動の主要な特徴

	運動の形態	担い手	志向性 (争点)
第1期 (昭和初期 ～1950年代)	生活保全運動 (作為要求型)	立地点の住民や自治体	補償の充実
	自然保護運動	都市部の研究者や文化人, 行政関係者	学術的に貴重な自然環境の保存
第2期 (60年代 ～80年代)	地域完結型 (作為 阻止型と作為要求 型の混在)	立地点の住民 (運動によっては) 地 区労など労組や革新系 政党, 研究者, 弁護士	計画の妥当性や公共性への 疑義, 権利防衛 補償の充実
第3期 (80年代 後半～)	ネットワーク型, 流域連携型の運動 (多様な運動の合 流)	立地点の住民 (運動が 衰退・消滅した地域も ある) 都市部や下流部など他 地域のアクター (環境 NPO, 研究者・専門 家, 文化人, 一般市民 など)	計画の妥当性・科学性とリ スク 自然環境の保護 多様なメディアを通じた市 民的公共圏の形成
第4期 (90年代 後半～)	オルターナティブ 志向型 (地域再 生・環境創造)		オルターナティブの提示と 実践 (治水・利水の代替案 作成, 植林活動, 公共事業 に頼らない村づくりなど), 自己決定

起がなされ、オルターナティブ (代案) を提示・実践する運動が顕著になってくる。また、運動の担い手が急速に多様化し、運動がコミュニティレベルからナショナルなレベルへと重層的に拡大していった。

1990年代後半の「森は海の恋人」運動について、帯谷は、次のように分析し、位置づけている [帯谷 2003]。

「森は海の恋人」運動も、1990年代後半になると子どもを中心とした環境教育に重点を移しながら、よりソフトな運動スタイルへと舵を切っていく。具体的には、植樹祭に合わせて、地元の特産品や漁業者の協力による牡蠣などの海産物を販売し、郷土芸能を地元の子供たちが披露する「水車まつり」を展開している。このようにより普遍的な「環境保

全」と「地域づくり」という志向性を、運動のリーダーたちが「環境教育の実施」を含めた運動実践の中で強めていった。(中略)

「森は海の恋人」運動の性格変容を整理すると、当初はダム開発から流域環境を守るという意味で環境保全運動であった。しかし、80年代以前に主流であった生活防衛のための告発型・対抗型の運動ではなく、「木を植える」ことによって新たな流域環境の創造をアピールし、運動過程において、上流部の室根村の知名度を上げ同村の地域づくりを触発するといった、「環境・資源創造運動」へと展開していった。表に示した第3期さらには第4期の特性を体現する環境運動と位置づけることができる。

「森は海の恋人」運動の中でもとりわけ注目に値するのが、漁業者を主体とした植林運動である。80年代後半に北海道および宮城県唐桑町で相次いで開始されたこの動きは、90年代以降、全国規模で急速に拡大している。森林の多様な機能や水および物質の「循環」に注目した下流部の漁業者が上流部に植林を行い、流域環境を守ろうとするこの運動は、山から海までを一体のものとして捉える「流域管理」の理念に裏打ちされたものである。同運動は、その表出的な運動スタイルと相まって各地に運動が波及するという運動面だけでなく、農水省（水産庁）や環境省といった中央省庁の政策変化を惹起するという政策面への影響など、多面的な社会的影響を有した。

これらの植林運動や森林づくりに関するボランティア活動は、1980年代後半以降全国的に興隆し、90年代に入ってさらに活発化し現在も増え続けている¹。これらの活動の目的や担い手は多様であり、活動形態においてもさまざまなものが見られる。これらの運動が興隆した背景には、自然との関わりを求める都市部の住民と、過疎化・少子高齢化に直面する農山村部の住

1 森林（もり）づくりを行っているボランティア団体数は、1997年の277団体から2009年には約10倍の2,677団体へと急増。林野庁「森林ボランティアの現状」を参照した。<http://www.rinya.maff.go.jp/j/hozen/volunteer/con1.html>